

本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注（六）

伊藤伸江・奥田 勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、翻刻と注釈を試みることにした。なお、今回の訳注で扱った句は秋から冬の発句である。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本（文明本）、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本（明応本）、中京大学所蔵『愚句芝草』（資料ID 0658259、請求記号 911.2/Sh64）の三本である。中京大学本は、江戸後期の写本で、東寺執行職を代々勤めている阿刀家伝来の本と思われる。序、発句、付句、跋文を持つ。文明本、明応本共に跋文はなく、この点で中京大学本は和歌と連歌の自作をおさめた集から、連歌のみの形で整えた形をはっきり見せている。今回より中京大学本も加え、校異を考えていくが、このうち、現在太田武

夫氏蔵二本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集 論集』（吉昌社・昭和二一）の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」、中京大学蔵『連歌愚句』は「中」とする。

一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者がへ書きで「マ」と注した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補った。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が妥当と考えられる語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。翻字本文との相違箇所については、翻字を適宜参照されたい。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、【校異】、【他出文献】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】【補説】等の項目も設けた。

一、【他出文献】にあげた心敬の作品集とその略称は以下の通りである。

心玉集（野坂氏本）↓心玉集（野） 心玉集（静嘉堂文庫本）↓心玉集（静）

心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）↓心玉集拾遺（静）

芝草内連歌合（天理本）↓芝草内連歌合（天）

芝草内連歌合（松平文庫本）↓芝草内連歌合（松）

於閑東発句付句（吉田文庫本）

心敬僧都百句（岩瀬文庫本）

また、芝草句内発句のうち、吾妻下向発句草におさめられた句は（吾妻下向発句草）と記した。

その他の他出文献に関しては、以下の通り扱う。

宗砌等日発句（大東急記念文庫本）は、宗砌等日発句、年中日発句（金子本）は、専順等日発句（金子本）、玉連集は専順等日発句（伊地知本）の名称及び句番号を『連歌大鑑』により用いる。

一、【語釈】【考察】【補説】にあげた和歌、連歌、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名、漢字等に改めた。

【翻刻】

秋風に帰らは雪のみやこかな

白川の関にてのほつ句なれば也いづれにも例の

能因法師か古ことを引かへたるはかり也

【校異】

秋風―秋かせ（中） 帰らは―かへらは（文、中） みやこ―都（明、中） ほつく―発句（文、明、中） 例の―なし

（文） 古こと―古事（明） はかり也―也（文）、計也（明）、斗也（中）

【本文】

71、秋風に帰らば雪の都かな

白川の関にての発句なればなり。いづれにも例の

能因法師が古言を引きかへたるばかりなり。

【語釈】○秋風に：秋風が吹いて、それによって。「七夕のひれふる袖の秋風にかへるはけきの別なりけり」（続後拾遺・秋上・文保百首奉りける時・前大納言実教・160）。「わするなよわかれぢにおふるくずのはの秋風ふかば今かへりこむ」（拾遺集・別・題しらず・306・よみ人しらず）。○雪の都：雪の降る都。「こころまつゆきてそすめるやまのおく／ゆきのみやこのとりのひとこゑ」（吾妻辺云捨・551／552）。「竹林抄」、『新撰菟玖波集』のとる「花の都」ならば、桜の花が満開に咲く、春爛漫の風情の都。○白川の関：現在の福島県白河市旗宿関ノ森。古代、下野国から陸奥国への関門であり、奥州三関の一つ。○能因法師が古ごと：能因法師が白河の関で詠んだという古い歌。「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（後拾遺集・羈旅・「みちのくににまかりくだりけるに、しらかはのせきにてよみはべりける」・518・能因法師）をさす。能因法師は、平安中期の僧侶歌人。永延二年（988）〜没年未詳。和歌に強い愛好心をいだき、「すき者」として有名。陸奥へ旅した。○引きかへたる：取り替えている。能因の歌の、春に出立、秋に到着というところを、秋に出立、真冬に到着と詠みかえたことをいう。秋に出で、春に都に着くとする形の方が能因の歌の季節を逆にした点、わかりやすいが、補説で述べるように、心敬自身は冬の帰京を詠みこんでいたものであろう。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草）584

心玉集拾遺1749（第三句「花のみやこ哉」、竹林抄1749（第三句「花の宮古かな」、新撰菟玖波集3770（詞書「白河の関にて」、第三句「花の都かな」、大発句帳584（第三句「花のみやこかな」）

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明二年秋の句。文明二年には、日光・会津・白河の旅に出ているが、この句は『竹林抄』に、直前の句と合わせ

白河の関見侍りけるに修理大夫入道のもとにて

1748 関も関木末も秋の梢かな 心敬

同所より立帰りける時、人のはなむけし侍し会に

1749 秋風に帰らば花の宮古かな

とあり、白河掬目城主結城修理大夫直朝のものと滞在から出立する際の連歌の発句であることがわかる。

異同に関して、『竹林抄』『心玉集拾遺』では、「花の都」であり、春の帰京となるが、『芝草句内岩橋』の四伝本は「雪の都」で異同はない。『心玉集拾遺』の表記は『竹聞』に次のように述べるところから、おそらく心敬より後の改変であろう。

正廣云、雪ニテハちかし、花ノ都ニテ可宜トアリ、宗祇同心して新撰ニ花ノ都ト入

正広が、白河の関から帰京することならば、「雪」では、都に帰りついた時期が近すぎるので、「花」の時期が適当であると述べ、宗祇もそれに同意して『新撰菟玖波集』には「花」として入れたという。撰集に際しての編纂事情がわかる注であった。

しかし、心敬自身は、秋と春という時期の対比を句に盛り込んで華やかに仕立てたのではなく、秋が去っていく白河の関から自らも去り、冬の都へと歩む、凍てつく季節に心細く旅をしていく心情を大切にしたのではないか。

【現代語訳】

秋風が吹き始めたことによって、ここ白河の関から帰っていったならば、雪が降っている、そんな時期の都に帰り着くことになるのであろうなあ。

白河の関で詠んだ発句なのでこのような詠み方になったのである。いずれにしても、あの例の能因法師の古歌を逆の形に詠みかえただけなのである。

【翻刻】

真ふり手か紅ひたす秋の水

紅をいたすをはまふり手とていかはかりも手

にてふりいたせは也水の紅葉に似たれは

【校異】

真ふり手か―まふりてか（文、明）、まふり手か（中） 紅ひたす秋―くれなひたすあき（文）、紅ひたす秋（中） 紅をいたすをは―くれなゐをいたすを（明）、紅出すをは（中） まふり手―まふりて（文、明、中） いかばかり―いか計（文、明） いたせば―出せば（明、中） 紅葉―もみち（中） 似たれば―似たると也（文）

※なお、連歌大観は発句に關し「真ふり手は」、注二行目に關し「こそふりいたせば」とするが、「真ふり手か」「にてふりいたせば」であろう。

【本文】

72、真振り手か紅ひたす秋の水

紅をいだすをば真振り手とて、いかばかりも手

にてふりいだせばなり。水の紅葉に似たれば。

【語釈】○真振り手^(まむ)：紅をたいそう鮮やかに溶かしだして、染めること。また、染めた色。「振り出」が、紅を水に振り

だして染めることであり、それを雨が降り出す「降り出」と掛けて使う。時雨は紅色ではないのに、紅に木々の葉を染めていくことを詠む。「まふりでの色にしぐれやそめつらんくれなゐふかき衣での森」（風情集・紅葉・268）。「立田川時雨の雨のまふりでに紅ひたす秋のしら浪」（心敬集・紅葉浮水・146（応仁元年百首））。○紅ひたす^(まむ)：紅葉が水一面にあでやかに浮かんでいる様。水が紅葉の葉で美しく染められるという表現は、業平歌「ちはやふる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは」（古今集・秋下・294・在原業平）以来、「くくると」により「くれなゐくくると」と表現された。しかし、心敬は『応仁元年百首』で「紅葉浮水」題を「紅ひたす」と詠んでおり、『応仁元年百首』の当該歌注も「此川水にもみぢうかべる面かげ、たつたひめの袖かとあやまたれ侍るなり」と注する（大谷俊太氏「新出・新潟吉田文庫蔵『心敬難題百首自注』について―付翻刻・校異―」。そこから、ここは染め出されたかのように、鮮やかな紅葉

が水に浮かんでいる様を表現しているとわかる。○秋の水：漢語「秋水」の訓読。白氏文集等に使われ、文集百首に歌語として詠まれている。「秋の水は秋の空にぞ成りにけるしろぎ浪まにうつる山かげ」（拾玉集・礙_レ日暮山青簇々、浸_レ天秋水白茫々・194）。冷たく透明な様が詠まれる。心敬は「げにも水程感情ふかく清涼なるものなし。：秋の水と聞けば、心も冷々清々たり。」（ひとりごと）と述べて、水の清らかさを愛していた。「枕の下の月はすさまじ／秋の水漲る山に旅寝して」（新撰菟玖波集・羈旅・2180／2181・詠み人しらず）。○水の紅葉に似たれば：：水の表面が、紅葉の葉が落ち広がって、紅葉した木々の様子に似通っている。「山風にしぐれこきおろす立田川ぬれて色こき水の紅葉葉」（洞院撰政治家百首・紅葉・701・藤原教実）。

【他出文献】 芝草句内発句 335

【現代語訳】

紅を鮮やかに水に溶かして染めたのだろうか。時雨が降り出して染まった紅色の紅葉が、まふりどのように鮮やかに水の中にひたっている、そんな澄み切った秋の水。

紅をとかし出すのを真振り手といって、いくらでも、手を使って振りだすことができるので（このように表現したので）ある。水面が紅葉の広がっているさまに似通っているので（このように詠んだのである）。

【翻刻】

きくほとは月をわする、しくれ哉

深夜などに時雨のこほれ侍るをきくた、ち

には月にうらめしき事をも忘る、感情ふかしと也

【校異】

きくほとは―聞ほとは（明） わする、―忘る、（明） しくれ哉―しくれかな（文）、時雨哉（明）、時雨かな（中）

きく一聞(明) 月に一ナシ(文) 忘るゝ一忘るゝ計(明)、わするゝ(中) 感情ふかし一かんせひふかし(文)、感情深し(明)

【本文】

73、聞くほどは月を忘るる時雨かな

深夜などに、時雨のこぼれ待るを聞く。直ち

には、月にうらめしきことをも忘るる、感情ふかしとなり。

【語釈】○月を忘るる…月を忘れてしまふ。時雨の降りくる音の情趣が、一つの美の極致であるはずの、照り輝く月の光も忘れさせるほどであること。時雨の際には、月は隠れてみえないことを前提に、それを補つてあまりある時雨の魅力を詠まんとしている。こうした句境は珍しく、「紅葉にや月を忘れし初時雨」(再昌第五・939・今日発句(永正二年九月))のように、時雨に染められた紅葉の美とあわせて時雨を称揚する句はあるが、雨音のみで月の美を越えるとするものは他に見受けられない。○直ちには…その結果、すぐに、すぐさま。○月にうらめしきこと…時雨を降らす雲が月を覆い隠すので、月を見ようとしても見ることができず、残念なこと。○感情深し…しみじみと感動が深い。『竹間』は、「時雨ノ感也、おもしろき也」と記す。

【他出文献】竹林抄¹⁷⁸³、新撰菟玖波集³⁸⁰³、心玉集⁸⁷⁷、心玉集(野)³³⁹、芝草句内発句³⁵⁰、芝草内連歌合(天理)²⁶²⁰、芝草内連歌合(松)⁸⁵、大発句帳⁶⁰⁰⁰

【現代語訳】

聞いている時には、雲に隠れた月を忘れてしまうほど、哀れ深い時雨の音であることよ。

深夜などに、時雨が降りこぼれている雨音を聞きます。そうするとすぐさま、時雨が降れば、月を眺めるためには残念なことだというのも忘れてしまう。そんなふうに住わせる時雨は、しみじみと哀れ深いということです。

【翻刻】

ことの葉にさむきいろそふ風もかな

木からしはさしもさえこほり侍れはわか哥道

のあたゝかなる方をさそひうしなひ侍れかしと也

【校異】

ことの葉に―ことのはに(文)、言葉に(明) さむきいろ―寒き色(文、明)、さむき色(中) 木からしは―木枯は(文、中)、さしもさえ―さも寒(中) こほり―氷(文、明、中) わか―我(文、明)、我か(中) 哥道―哥の道(中) うしなひ侍れ―うしなへ(明)、失侍れ(中)

【本文】

74、言の葉に寒き色添ふ風もがな

木枯しは、さしもさえこほり侍れば、我が歌道

のあたたかなる方を誘ひ失ひ侍れかしとなり。

【語釈】○言の葉…言葉。ここでは、心敬自身の歌の言葉。また、「寒き色」の用いられ方から、松の葉を掛けていると

考えられる。○寒き色添ふ…寒々しい色が加わる。「寒き色」は、中世までの和歌では多く冬の寒冷な気候の中の自然の緑、特に松の緑の様をいった。「すみよしの梢の雪の下みどり風よりも猶寒き色かな」(拾玉集・冬・159)。「しもゆきにつれなきまつこのふゆのころそここたへてさむき色みゆ」(伏見院御集・冬松・153)。連歌においては、さらに広く月や日、水、山の様、草、露などが表現されてきた。「子日せし野への松虫又鳴て／今はた袖の露さむき色」(河越千句第九百韻・47／48・心敬／満助)。「寒き色ある山の浮雲／たにふかきいづみのうへにかせふきて」(心敬専順点宗祇付

句・399)。この句では、木の葉を吹くことで、さらにあたりの寒さを感じさせる木枯らしの訪れを願うのと、自らの歌の言葉に透徹した色を添える、そのような歌風を願う気持ちに合わせて詠まれており、冷たくひきしまった凜とした詠みぶりが加わることをもいう。○風：自注で述べるように、表面上は木枯らしを意味するが、歌の風であり、詠風、詠歌の傾向をいう。「敷島の道の春風霞みきてたがことのはも色ぞ添行く」（草根集・初春霞・198）。「学びえよこひねがはしきみな月の風のすがたを大和ことのは」（草根集・夏風・3065）。○さえこほる：冷たくこごえること。「さえこほる嵐の身を身にして独ぞみつるあり明の月」（宝治百首・冬月・2280・西園寺実氏）。「さえこほる嵐もよしや朝な朝なかれて花開く霜の浅茅生」（松下集・三百六十番自歌合・寒草霜・2968）。○あたたかなる：歌において、その詠みぶりが透徹した鋭さを持つに至っておらず、緊張感が欠落している様。「一、心持ち肝要にて候。（中略）心はふかく欲心をかまへ、あたたかなるあてがひにて、詞ばかりにうく・つらき・かなしき・あぢきなき・世をいとふ・身を捨つるとのみいへども、かたはらいたくこそ候へ。しみこほりもせず候。」（心敬法印庭訓）。

【他出文献】心玉集（静）880、心玉集（野）342、芝草句内発句359、芝草内連歌合（天理本）2622、芝草内連歌合（松）87

【補説】連歌で、「寒き色添ふ」景物として月や日、水、山の様、草、露などが表現されてきた中で、「言の葉」は特異であり、発句においてもみずからの心情を強く表面に出す心敬らしさが見える句である。さらにまた、「言の葉」への思いからは、緊張感を持つて和歌・連歌表現を選び抜き、物事の真実の姿に迫ろうとする姿勢が感じられる。この句は文明五年の『芝草内連歌合』（天理本）では、この句は「色残すかざしの荻の枯葉かな」と番わせられ、「吉持」と判定されている（『芝草内連歌合』（松平本）も同じ）。源氏を詠みこんだ本説の句とめざすべき歌境の獲得を願う気持ちを言葉の掛けで示した句が組み合わせられており、心敬の中では、両句は、類似の意識から技巧をこらして作られた句であつたといえよう。

【現代語訳】

木枯らしによって、木の葉に寒々とした色が添えられるように、私の歌の言の葉にも、寒く冷えさびて、澄みきった調

子加わってくるような詠風がほしいものだ。

木枯らしはあれほど冷たく凍るものなのですから、私の歌の道の、ぬるく緊張感のない言葉を誘って取り去ってほしいですよ、ということである。

【翻刻】

ゆく人の木葉になせる時雨かな

人の行かふを見てきては雨にはあらずとみたる斗也

【校異】

ゆく一行（明、中） 時雨かな—しくれかな（文）、時雨哉（明）、しくれ哉（中） 見て—みて（明） さては雨にはあらずと—扱は雨には非と（明） みたる斗也—みたる也（文）、也（明）

【本文】

75、行く人の木の葉になせる時雨かな

人が行き交ふを見て、さては雨にはあらずと見たるばかりなり。

【語釈】○木の葉になせる…時雨が降る音ではなく、木の葉が散り降る音であったとわかること。時雨の降る音は、木の葉の散る音と紛うので、木の葉がしきりに散る音は、時雨の音にたとえられ「木の葉時雨」「木の葉しぐるる」などと歌にも詠まれる。木の葉が散る音と時雨が降る音を共に感じることで、初冬の寂しさが一層強く感じられてくることになる。「まばらなる槇の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらん」（千載集・冬・崇徳院に百首歌たてまつりけるとき、落葉のうたとてよめる・藤原俊成・404）。「ふりまじるをとぞたえせぬ神無月木葉、風に雲は時雨に」（草根集・落葉・10979）。

時雨なとし侍れは神楽の後頭中将かなて給へ
 とてにはかの事に侍れはうへの袖をほころはし

荻のかれ枝をかさしてまひ給へるえんふかき

ことを思ひいたして申侍り此発句は当座

事の外あひにあへるとて感じ侍しなり耳のある

連衆たちにて侍しかはいかほと面目かましかりし事也

【校異】

のこす―残す(文、明) かれ葉哉―枯葉かな(文)、枯葉哉(明)、かれは哉(中) 神な月―神無月(文、明、中)
 あまりの比―余の比(文) 人の―ナシ(明) 興行し侍れは也―人の興行し侍れは(明) かのすまよりの―彼須磨よ
 りの(文、中)、彼須磨より(明) かへりまうしに―帰り申に(中) 住吉まうてし―住吉まうてして(文)、住吉詣し
 (明) かと―ナシ(中) させ給ひしのち―させ給し彼(文)、せさせ給しに(明)、させ給し後(中) 感情―かんせひ
 (文) 松のはけしきはかり―松の気色計(文)、松の葉の気しきはかり(明)、松の葉気色斗(中) うち時雨―打時雨
 (明)、うちしくれ(中) 神楽の後―神楽の、ち(文) にはかの事に―俄のことに(文)、俄の事にて(明)、俄の事に
 (中) うへの―上の(文) かれ枝―古枝(文)、枯葉(明) まひ給へる―舞給へる(文、中)、舞給へは(明) えん
 ふかきことを―えんふかき事を(文、明、中) 申侍り―申侍(文)、申合侍り(明) 此―ナシ(文) 当座事の外―当
 座事外(文、中)、満座ことのほか(明) 感じ侍しなり―かんし侍也(文)、感じ侍し也(明、中) 耳のある―耳ある
 (明) いかほと―いか程か(文) 面目かましかりし事也―面目かましく侍(文)

【本文】

76、色残すかざしの荻の枯葉かな

神無月十日あまりの比、人の住吉法衆とて

興行し侍ればなり。かの、須磨よりの帰り申しに、住吉詣でし、神楽などさせ給ひしものち、

時雨などし侍れば、神楽の後、頭中将かなで給へ

とて、にはかの事に侍れば、上の袖をほころばし、

荻の枯れ枝をかざして舞ひ給へる、艶深き

ことを思ひ出だして申し侍り。この発句は、当座、

事の外あひにあへるとて感じ侍りしなり。耳のある

連衆たちにて侍りしかば、いかほど面目がましかかりし事なり。

【語釈】○色のこす…まだ紅葉した色を残している。○かざしの荻…かざし(挿頭)は、草木の花や枝葉を頭髪や冠にかざつたもの。挿頭として頭に飾つた荻。この表現が『源氏物語』で見られるのは若菜下巻の住吉詣である。↓【考察】『河海抄』は、若菜巻の住吉詣の記述において、「荻挿頭事」として、「人長の事も尋常には柵をもつ也但清暑堂の御神楽の試楽執柄家にておこなはるゝ時かれたる荻の枝を持也」という。『源氏物語提要』、『源氏一滴集』に記載はな
いが、一条兼良は、『花鳥余情』で「荻をかさす事は人長の作法といへり 人長は神楽にあり 東遊のかた舞の事に
へるおほつかなし」と『河海抄』によりつつも疑問を述べ、また『源氏物語之内不審条々』では、神楽に荻をかざして
舞う例、東遊に荻をかざす例、いずれも確証を得られないと言う。○枯葉かな…枯れた葉をかざしていることよ。荻の
枯葉は、若菜巻の住吉詣に関して、祐倫の『光源氏一部歌』が「わかき殿上人はたかき萩アキのしろくかれたるをかさして
みしかき物をほのかに舞てかへりいるいとおもしろし」と記し、『源氏大鏡』一類本である『光源氏一部調并詞』でも
「わかきてん上人たちは、かれたるおきのしろきをかさして、みしかき物ともをまいて帰りいるも、あかすおもしろ
し」と着目して記す。さらに、『源氏こかゝみ』(室町期大型写本)には、若菜下の源氏詞として「かれたるおき」があ
り、「これはすみよしのかれたるおき」と注している。『源概抄』も「かれたる荻」に「住吉ノカレヲキトハコレ也」と

注していた。源氏大鏡類に取り上げられ、小鏡類にも連歌詞として取り出されており、源氏物語の梗概書で注目すべき箇所であったようで、心敬と同時代頃の連歌師が着目しやすいいピソードであった。○かへりまうし…神仏へのお礼参りをいう。○住吉法楽…和歌や連歌を住吉の神に奉納すること。ここは住吉法楽連歌を行ったということである。心敬の出した句は、源氏物語の住吉詣の場面から取っており、住吉法楽にちなむ。○感情ふかく…しみじみと感動が深いこと。↓73語釈 ○かなで給へ…お舞いなさい。「かなづ」は舞いを舞うこと。○ほころばして…脱いで。「ほころばす」は脱ぐこと。○あひにあへる…びったり一致していること。びったりはまっていること。「かくてこそあひにあひぬれながらぬ柴の袖かきあさのさ衣」(草根集・山家・488)。「面影もやどさばやどれますかがみあひにあひぬる秋夜の月」(春夢草・恋下・寄鏡恋・1709)。○耳のある連衆たち…耳の肥えた一座の参加者たち。連歌に関して、教養があり、理解力・鑑賞力にもすぐれた参加者たちであるということ。この句は『心玉集』、『芝草句内発句』の配列位置から、在京時の発句ということが推定できるが、いつのどんな百韻かまではわからない。○面目がまし…名誉を得て、面目が立ったような感じであること。住吉法楽連歌の発句としてびったりであると賞賛されたのである。

【考察】『源氏物語』において、光源氏が須磨より帰京し、須磨での住吉明神への願がかなえられたお礼の住吉参詣をなしたのは『源氏物語』濡標の巻である。しかし、この時の物語の記述には、「その秋、住吉に詣でたまふ。願どもはたしたまふべければ、いかめしき御歩きにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人、我も我もと仕うまつりたまふ」とあるのみで、頭中将の舞などの記述はない。頭中将の舞は、紅葉賀巻での、光源氏との青海波の舞があるが、そちらは清涼殿前庭での試楽と、朱雀院の行幸の舞楽であり、かざしは紅葉と菊であった。光源氏は若菜下の巻でも、明石入道が住吉の神に立てた願の願ほどきのために住吉参詣をしており、その際には、舞人たちが枯れた荻をかざしに舞う。それゆえ、心敬の念頭にあった住吉詣は若菜下の場面と考えられる。青表紙本の本文は以下の通り。

十月中の十日なれば、神の斎垣にはふ葛も色変りて、松の下紅葉など、音にのみ秋を聞かぬ顔なり。ことごとしき高麗唐土の楽よりも、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろく、波風の声に響きあひて、さる木高き松風に吹

きたてたる笛の音も、外にて聞く調べには変りて身にしみ、琴にうち合はせたる拍子も、鼓を離れてととのへとりたる方、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごうおもしろく、所がらはまして聞こえけり。山藍に摺れる竹の節は松の緑に見えまがひ、かざしの花のいろいろは秋の草に異なるけちめ分かれて何ごとにも目のみ紛ひいろふ。求子はつる末に、若やかなる上達部は肩ぬぎておりたまふ。にほひもなく黒き袍衣に、蘇芳襲の、葡萄染の袖をにはかにひき綻ばしたるに、紅深き袂の袂のうちしぐれたるにけしきばかり濡れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに思ひわたさる。見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる荻を高やかにかざして、ただ一かへり舞ひて入りぬるは、いとおもしろく飽かずぞありける。

心敬は、源氏本文では「若やかなる上達部」のなした、袍の右肩を脱いだ所作を、頭中将の所作とする。これはテキストによらず、記憶によったためか、このような内容の梗概書等によったか。もしくは心敬自身の意図的脚色か。

【他出文献】 心玉集（静）879、心玉集（野）341、芝草句内発句360、芝草内連歌合（天）2623、芝草内連歌合（松）88

【現代語訳】

まだ枯れる前の色を残している、かざしにした荻の枯葉であることだよ。

旧暦十月の十日くらいの頃に、ある人が住吉法楽のためにというので連歌を張行しましたので、この句を詠んだのである。

あの（源氏物語の）、（光源氏が）須磨からの帰京のお礼の報告に住吉詣でをし、神楽などをおさせなされた後に、時雨などが降りましたので、神楽の後に、頭中将がお舞いなさいということで、突然のことでございましたから、上着の袖をゆるめて、荻の枯れ枝をかざして舞われたという、大変優美である事柄を思い出して、申しました。

この発句は、当座の場で、とりわけ、句の様子がその時の状況にぴったりかなっているというので、皆が感動したものです。耳の肥えた参加者たちでございましたので、どれほどばかり面目が立つような思いで誇らしかった

テ世間ヲ紅塵ニ喩タル也」(六花集註(蓬左文庫本)・後掲藤原光俊歌の注)。ここは、そのようににぎやかな都に立つ塵そのものをさしている。連歌においては、心敬以外では、永正年間に詠まれた例が見られる。「苔深きみどりのほらは紅のちりのほかなるすみかなりけり」(夫木抄・塵・六帖題・7990・衣笠家良)。「ましはれる神や染なす紅のちりにかすめる世は春にして」(章根集・早春・8957・宝徳二年六月二日詠)。「立ちつとも四方の霞に紅のちりぞ都の山と成ららむ」(六華和歌集・105・藤原光俊)。高い山もふもとの塵より成ると述べる古今集仮名序から、光俊の歌は紅の塵が都の山となるたとえるが、心敬は紅の塵は都に散り落ちた紅葉であると見た。また、行助の次の句は「塵」に「紅」を付けていよう。「はては塵とやはなのちるらん／くれなるは春のわか葉を始にて」(行助句集・1607/1608)。○都：「都」を「見や(る)」と掛けているのであろう。○紫陌：都の市街。都の道路。○紫陌紅塵：都のにぎやかな通りの塵。「紫陌紅塵拂面来 無人不道看花回」(元和十一年自朗州召至京戲贈看花諸君子・劉禹錫)。「万頃の天に自ら遊んで、紅塵の外に白頭の翁となりにけり」(太平記・巻四吳越戦の事)。

【他出文献】心玉集(野) 338、心玉集(静) 876、芝草句内発句 372

【現代語訳】

賑やかな都会の紅の塵を見やれば、それは都に散り敷いた紅葉した木の葉であることよ。

紫陌紅塵などといって、都をたとえ、おしゃれで粋な場所としているのであるから、都の落ち葉は、さしずめ紅の塵ともいうべきであろうかということである。

【翻刻】

秋の葉は雪気の雲をなこり哉

雪気の雲は黄色なるといひならはし侍れは

秋の葉の色のならは是まてと云り

【校異】

をなこり哉―を名残かな（文）、の名残哉（中） 雪気の雲―雪げの雲（文） 黄色なる―黄なる（文） いひ―云ひ（中）
 のなこりは是までと云り―名残ははや是までといへり（文）、の名残は是までといへり（中）

【本文】

78、秋の葉は雪気の雲をなこりかな

雪気の雲は黄色なると、言ひならはし侍れば、

秋の葉の色のなこりは是までと云へり。

【語釈】○雪気：いまにも雪が降り出しそうな様子。「はるさえてゆきげにかすむことしかな」（成立不詳宗砌以前何木百韻（はるさえて）・発句）。「こりつむ柴をはこふ通路／今朝よりや雪気にさゆる雲の色」（寛正二年正月二十五日何路百韻・24／25・行印／久泰）。○雪気の雲：雪になりそうな気配を見せている雲。「空さゆる雪げの雲もすみがまのけぶりにまがふ大はらの山」（新統古今集・冬・733・民部卿為明）。「雪気の雲」は、拾玉集に多く、七例見られる。「ひらの山に雪げの雲は見ゆれども都の空は時雨のみして」（拾玉集・一日百首・932・雪）。時雨が降りそれが雪に変わる天候は、雲の様でいえば時雨雲が雪気の雲に変わっていくと考えてよいのであろう。「またれつる雪げかところ思ひつれいまだ時雨の雲にざりける」（源三位頼政集・待初雪・294）。「時雨トアラバ、雪気の雲」（連珠合璧集）。○黄色：雪気の雲の色を黄色とした発想の句は心敬のほか管見に入らない。ただ、心敬は和歌にもこの言葉を詠んでいる。「神な月秋の紅葉の一しほに雪げの雲をそむる雨かな」（心敬集・冬雨・410）。本句の自注を参考にすれば、この歌の発想の根底にも、雨により染められた黄葉と雲の色の類似を考える気持ちがあるう。ただし、現存伝本（島原松平文庫本、続群書類従本）は「紅葉」の字を当てる。○言ひならはす：世の中ではそのように皆言っているということ。

【他出文献】心玉集（静）892、心玉集（野）353、芝草句内発句383

【現代語訳】

秋の黄葉した葉は、雪気の雲をその色のなごりとしてとどめているのだなあ。

雪が降りだす気配をみせている雪気の雲は黄色であると世間では言っておりますので、秋の黄葉した木の葉の色
のなごりは、こんなところまでもあるのだと言っています。

【考察】

「雪気の雲」の色に関して、荒木健太郎氏（気象庁気象研究所予報研究部研究官）のご教示によれば、朝か夕方に太陽高度が低い場合、レイリー散乱の影響で波長の長い暖色系の色が残り、これにより雲の色が黄色を含め暖色系になることはよくある。会津では、西高東低の冬型の気圧配置となつているときに、日本海上で発達した積雲もしくは積乱雲が谷筋などを通つてきて降雪となる。それゆえ、朝か夕方に日本海側から流入した積乱雲などの雲が、レイリー散乱で暖色となつた太陽光を受け、黄色っぽく見えていることを指しているのではないかと、このことである。この現象は、会津のみならず京都、関東南部でも起こることとされており、この言葉は朝の時間帯にその日の天気を予想するものとして言われていた観天望氣の言葉ではないかとされる。

氏のご教示の通り、心敬の周辺では、天候の変化のきざしが仔細に観察され、黄色っぽい積乱雲が見えれば雪になるといった、天候に関することわざが言われていたのであろう。『芝草句内岩橋』は文明二年七月に会津で兼載に与えられているが、心敬は文明二年春に河越におり、日光から会津、白河への旅に出る。そのうち会津滞在は晩夏から初秋にかけてであり、京都また関東で耳にした言葉から発想したことも考えられよう。なお、心敬集410歌は、「冬雨」題で、神無月に雨を降らせる雲の色に、秋の紅葉の色が受け継がれたとみており、句の表す時期がわかる。

76、77、78と色彩を意識した句が続き、身のまわりの自然の色彩に関する、心敬の鋭い感受性を垣間見せている。

なお、この句は、明応本には見られず、この句の出入りが本文系統の一つの目安となっている（↓伊藤伸江「芝草伝本の一考察―大阪天満宮蔵『連歌芝草』『芝草抄』の紹介と『芝草抄』翻刻―」（『文字文化財研究所紀要』第五号・平

成三二・三三)。すなわち、明応本は、句の配列が75、77、76となり、明応本系統の特徴を持つ伝本である書陵部本『志波久佐』はこの句を77句の後にイ本より行間に挿入している。大阪天満宮本『連歌芝草』も、明応本同様に75、77、76の配列であり、これに対して、文明本、中京大学本は本能寺本と同一の配列をとるものである。

【翻刻】

篠かしけ橋に霜ふる山路哉

まことに山路のさまを申たて侍り木のね

岩のはさまに小篠はかしけて一すちの朽木の

橋にのみ霜こほり侍ると也此句に水辺なとませ

侍らは無下に感情をくれ侍るへく哉

【校異】

霜ふる山路哉―霜ふるやまちな (文)、霜降山路哉 (明)、霜ふる山路かな (中) まことに―誠 (文)、寔 (明)、誠に (中) さまを申たて侍り―様を申度侍り (文)、さまを申たて侍り (明) 木のね―木の根 (文、明、中) かしけて―かしけはて (文、明) 一すち―一筋 (明) 朽木の橋にのみ―朽木橋にのみ (文)、朽木の橋には (明) 霜こほり侍ると也―霜こほり侍ると也 (文)、霜白く氷り侍ると也 (明)、霜氷侍ると也 (中) ませ侍らは―させ侍らは (文)、交り侍らぬを (明)、よせ侍らは (中) 無下に感情をくれ侍るへく哉―無下にかんせひをくれ侍るへくや (文)、粉骨也 (明)、無下に感情をくれ侍へく哉 (中)

※なお、発句に関して連歌大観は「山路かな」と記すが「山路哉」である。

【本文】

79、篠かしげ橋に霜降る山路かな

まことに山路のさまを申したて侍り。木の根、

岩のはざまに小篠はかしげて、一筋の朽木の

橋にのみ、霜こほり待るとなり。此句に、水辺など混ぜ

侍らば、無下に感情後れ侍るべくや。

【語釈】

○篠…群生した、背丈の高くない竹。「篠トアラバ、小ぎ、玉ぎ、をぎ、が原ぎのくまなどいふ。」(連珠合璧集)。「里もあせ篠分る霜の山かつもかしけ行冬の末の哀さ」(草根集・山路篠・7756・享徳元年十月二十日詠)。○朽木の橋…くちはてた木の橋。「道のくの朽木の橋も中たえてふみだに今はかよはざりけり」(堀河百首・橋・140・河内)。○無下に感情後れ…はなはだしく情趣が少なくなり。「感情」は73、75句参照。

【他出文献】心玉集(静) 887、芝草句内発句361、所々返答第三状

【補説】所々返答第三状では、この句に関し、次のように説明している。

愚句に、

篠かしげ橋に霜ふる山ぢ哉

これも、させるふしなく侍ども、五文字(の)すゑに橋の縁語を申さず(し)て、ひとへに山路の木の根・岩がねに、おろそかにうちかけたる風体、水辺の物を申ざるを、作者(の)粉骨と存侍る歟。

一句の中に、「橋」にひきずられて水辺の景物を入れることをしない、という点が、心敬の最も苦心した点である、と
言う。一句に山類と水辺の語句が両方入ると、句がごちゃごちゃするのであろう。

自注「ませ侍らは」の部分の本文校異で、「ませ」は、文明本は「させ」、中京大学本は「よせ」であった。これら伝本の本文では、付合で、山類の前句に水辺の付句で付けることになるが、『所々返答』の本文から、自注は一句内に水

辺と山類を表す語句が混在することを戒めていることがわかる。文明本、中京大学本の本文が、この句に関し本能寺本よりも劣ることが確認しうる。

【現代語訳】

篠は傾いて、橋には霜が降りつもっている、そんな山路のさまであることよ。

本当に、山路の様子を申し述べたものです。木の根や岩の狭間に、小篠が傾いて生えており、一本の朽ちた木の橋にだけ、霜が白く凍りついているのです。この句に、水辺の言葉などを混ぜましたならば、絶対にひどく情趣が劣ってしまうはずですよ。

【引用文献典拠一覽】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった（『新編国歌大観』によった場合には、（類題本）と注している）。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本（旧国歌大観番号）により、引用は『新編日本古典文学全集』によっている。連歌関係その他、引用は左記に記すが、『連歌大観』第一巻（古典ライブラリー・平成二八）を適宜参照している。

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学蔵貴重連歌資料集一』（平成一三・臨川書店）（連歌新式、新式今案共に）による。『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合は、木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

連珠合璧集…中世の文学『連歌論集（一）』（三弥井書店・昭和四七）

竹林抄…新日本古典文学大系『竹林抄』（岩波書店・一九九一）

新撰菟玖波集…『新撰菟玖波集全釈』

- 竹聞：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）
 所々返答：中世の文学『連歌論集（三）』（三弥井書店・昭和六〇）
 源概抄・光源氏一部詞并詞・源氏こかゝみ（室町期大型写本）：『源氏物語古註積叢刊第十卷』（平成二二・武蔵野書院）
- 花鳥余情・源氏物語之内不審条々：『源氏物語古註積叢刊第二卷』（昭和五三・武蔵野書院）
 河海抄：『紫明抄・河海抄』（昭和四三・角川書店）
 源氏物語：日本古典文学全集本
- 六花集註：古典文庫『六花集註「蓬左文庫本」』（昭和五二）
 六花和歌集：古典文庫『六花和歌集』（昭和四七）
- 心敬集：『松平文庫影印叢書第13卷私家集編二』（新典社・平成一〇）
 太平記：新編日本古典文学全集本
- 大谷俊太「新出・新潟吉田文庫所蔵『心敬難題百首自注』について―付翻刻・校異―」（かがみ・第四十二号）（大東急記念文庫・平成二四）